

北陸のほうで多く見かける雪吊り、これは人を喜ばせる大事な木の枝に雪で負担がかからないようにするものです。また、こもまきも大事な木にされますが、これは、虫をそこに集めておき春になると燃やして虫を殺すためにするのです。この虫たちは自らの命を得ようとして、結果的に殺されてしまうのです。あなたは虫の方ですか、それとも大切にされる木ですか。今あなたが木のようにまわりに助けられているでしょうか。それとも虫のように自らの問題の中に入っているでしょうか。木は自らで動くことはできないので、何かをすることはできませんが、私たちは木から、温かさや、安らぎを得ています。あなたは人間関係の中で人に安らぎを与えていますか。そうであれば、あなたは人に安らぎを与え、かつ周りの人から愛され、大事にされているはずで、あなたはどのようにでしょうか。「得たいのなら与えなさい」これが聖書の教えです。私たちは得ようとするれば何かに伴います。しかし大事にされる木は雪吊りやこもまきをしてもらおうと、私たちに安らぎを与えているわけではありません。その存在自体が安らぎなのです。(ルカ6：27～38)ここでは人と人との関係について語られています。「自分を悪く言うものを愛する」これはとても難しいことですが、どうして私たちはこれができないのでしょうか。私たちは人の間で見返りを求めてしまうからです。「自分はしているんだから相手もそれをすべきだ」というのが強い考えです。あなたはどのようにしてそんなに人からされたいのでしょうか。「受けるより与えるは幸いです」と聖書にはあります。しかしこの考えが根底にあったら与えることはできません。頭の中では与えるということはわかっている、でもできない、それよりも虫のように自らの命を得ることにこもに入ることに忙しい、その結果、失ってしまう・・・このようになっていませんか。(使20：34、35)「あなたが自身を知っているとおり、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。」(34)今は、このレベルまでいってほしいのです。パウロは自分のために相手にするのではなく、自分のためにも相手のためにも使い分けることをしました。「与えなさい」といいますが、あなたは何を持っていて、何を人に与えることができますか。「何を持っているかわからない」だからイエス・キリストは全てを与えなさいと言っています。与えられないのはあなたの人生をあなたのものだと思っているからです。あなたのものだと思っている限り一生誰にも与えることはできないし、誰からも受けることはないでしょう。人よりも多く持ち、無駄なものを蓄える、これが豊かになるということですが、豊かになりたい理由が先行きの不安になるとこうなり自己中心つまり、的を外してしまうのです。困ったとき、問題があるときに出る態度がその人の生き様です。どんなにいい時にいいことが言えても、それが根底にあっては人に与えることができません。根底にあるそれを捨ててはいけません。裏切られたときに「あれだけやってあげたのに・・・」そういう心が出るのであればいくら与えるつもりでやっても、私たちの中心には与えたゆえの見返りを求める行動になってしまいます。自らのために生きるのであればこもの中で死ぬ虫ようになってしまおうでしょう。しかし、自らを捨てる人々に喜びを与えるのであればあなたは雪吊りやこもまきをされる木のように守ってもらえるはずで、与える者となるために**①自分の持っているものを知る**。自分が持っているものを見失った時点で与えることができません。あなたは何をもっているか知っていますか。そしてそれは何のために与えられているのでしょうか。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。」私たちはみな与えられてきて自らで得たものは何一つありません。しかし私たちは自らで築いてきたものだと思っているのです。だから与えることができません。ただで受けたものを自分で得たと思っているからです。神様はそんな私たちにくもの糸のように救いの糸を差し伸べてくれましたが、私たちは後から来たものを蹴落とそうとしてしまうのです。(箴13：7～9)身の周りに富を築いてもそのいのちに富がなければ何の意味もありません。自分は豊かだといって心の中はさびしくてしかたない、だから着飾ってしまうのです。私たちの方向が間違っているとそうなります。今、あなたの心は外側を着飾る心でだまされていませんか。自らのものを自らのものだと思わなくなった時に自ら持てるものに気付くはずで、自分のものだと思っているうちは、持てるものとしてはわからないのです。あなたの人生、たくさんの方があなたを励まし愛を与え助けてくれました。その結果これまで知らなかったものを持ったのです。自分が受けたものを思い起こしてください。これが感謝につながるのです。自分のものを捨て、与えられたものを捜してみてください。自分の価値観や考え方は小さいものです。私たちの価値観も誰かが作ったものを通してできました。だからその根源に目を向けなければ、私たちの価値観は新しくなりません。「あなた」と決めた時点であなた以上の成長はありません。「弟子は師を越えることはできない」と聖書にあります。だから私たちは聖書の中から師を学び最終的にはイエス・キリストに習うものになってほしいのです。自己中心は自らを失っていきます。**②まくべき地にまく**。「与えろ」と言っていますがあなたは今誰に与えているでしょうか。(箴22：16～19)私たちは自分にとって良い人にしたいのです。人の評価を気にしていると、本当に困っていて与えるべき人の声を無視してしまいます。ソロモンは自らのためではなく民や人のために求めたので知恵を与えられました。栄華や富、見返りを求めず、自分には能力がないと思っていたところがすばらしかったのです。正しい思いがあるから知恵を与えられたときに正しくその知恵を用いられるのです。まくべきところを間違えると不毛になります。誰にでも安らぎを与える八方美人ならいいですが、自分のための八方美人はいけません。(自分がそこで平和に過ごすためなど)執着こそが自分のためなのです。自らのためにでなく、自分よりも弱い人のために用いるべきです。**③つまずきをまかない**。よいことをしていても不平不満を言っていたのではどうでしょう。これが全て相手に対しても自分に対してもつまずきです。あなたにそのつもりがなくても相手がつまずくかどうかです。あなたはそのままの価値観でいいのでしょうか。(マタイ13：41、42)つまずきを与えているとそのつまずきで泣いて歯軋りするようになってしまいます。あなたはそのつもりでなくても、あなたの言動がつまずきを与えてしまうのです。日々の生活が不平、ぐち、裁きにならないようにしないとダメです。それはあなたに知らないうちに返ってきます。ぐちを解決できるところに言うならいいです。しかし私たちは弱いところにぶつけてしまうのです。逆でなくてはいけません。一日を振り返れば、言っていないつもりでも、結構言っているものです。振り返れば分かりますが、振り返らなければわかりません。そして振り返って失敗していたとしても後悔するのではなく、悔いて改めることが大切です。同情はいりません。あなたは一步上に立ち、本当に与えるものとなるために、自ら持てるものを失い、どれほどのものをあなたが与えられているか気付いてください。あなたは道具を持っている人です。受けたものでそれからそれを用いてください。そして蒔くべきところに蒔いてください。そうすれば結果、多くの方があなたを愛してくれるようになるはずで、自分の持っているものをしっかりと知り、それを用いて受けるよりも与えるものになっていきましょう。(要約者：岩崎祥誉)